

「アキラ君は老け顔」

國吉咲貴

【登場人物】

小川あきら (22) ・ 老け顔の大学生

母 ・ あきらの母親

荻原 ・ 母の恋人

荻原小春 (24) ・ 荻原の娘

水井薫 (22) ・ あきらのバイト先の同僚

福山 ・ あきらのバイト先の同僚

戸部 ・ あきらのバイト先の客

荒井 (21) ・ あきらの友人

朝。小川家のリビング。中央にちゃぶ台がある。

母が忙しく動いている。洗濯を畳んだり、食事を持ってきたり、何度も出捌けを繰り返している。

母「あきらー・・・あきらー！ もう起きなきゃでしょー！・・・あきらー、8時になるよー、あきらー・・・」
去る母。

母の声「あきらー！ いい加減起きな！ 学校遅刻するでしょー！ いいのー!？」

母、やってきて食事を食べ出す。

あきら「(22)の、のっそりとやってくる。とんでもない老け顔。

あきら「・・・お母さん仕事は」

母「もう行くよ。アキラとおんなじくらいに出る」

あきら「・・・ふーん」

母「ご飯食べちゃいな。焚きたてだよ。卵かけご飯する?」

あきら「・・・いらなこ」

母「食べなきゃ一日もたないでしょ。卵かけごはんにする?」

あきら「いらなこ」

母「焚きたてだから。食べなよ。卵かけご飯でいい?」

あきら「いらなこ」

母「卵かけご飯しないの?」

あきら「いらなこってば」

母「なんで。焚きたてだよ?」

あきら、母を無視する。

母「授業もたないよ」

あきら「んー・・・」

母「途中で寝ちゃうよ」

あきら「うん」

母「うんじゃないでしょ。お母さんはあんたを大学行って寝かせるためにお金出したんじゃないからね。デヴィ夫人みたいに大金持ちだったら寝るためにあんたを大学行かせるかもだけど、この家の経済状況……」

あきら「わかってるよ、わかってる」

母「大学行きたくても行けない人だっているんだから……」

あきら「知ってるって、わかってるよ……しつこいよ、朝から……」

母「今日も帰り遅いの?」

あきら「あ、うん、昨日と同じくらい……」

母「ご飯買うお金ある?」

あきら「うん」

母「おにぎり持ってく? 焚きたてだし」

あきら「いいよ、鞆重くなるから。あっちでなんか買っ」

母「あ、あのき」

あきら「うん」

母「今日、夜、来るよ・萩原さん。あきら、7時くらいでしょ、帰るの」

あきら「……いや、もっと遅いかも」

母「昨日と同じくらいに帰るんじゃないの」

あきら「んー……わかんない。その日によるから……」

母「じゃあなるべく早く帰ってきなよ。小春ちゃんも来るしき」

あきら「ああ……」

母「7時くらいに来るって。あ、夜パエリアだよ」

あきら「へえ」

母「小春ちゃん、明日朝早いからあんまり遅くまで居れないんだって」

あきら「そう……。あ、じゃあ遅くなりそうだったらメールする」

母「早く帰れそうなら帰ってね」

あきら「うん・・・」

立ち上がるあきら。

母「もう行くの」

あきら「うん」

母「お母さんと一緒くらいに出れば大丈夫じゃないの」

あきら「あ、今の方が電車乗りやすいから・・・」

母「そう・・・」

あきら「うん・・・」

母「なるべく早く帰っておいで」

あきら「・・・わかんないけど」

母「うん・・・パエリアだからね」

あきら「・・・うん」

母「その服で行くの?」

あきら「・・・うん、変?」

母「いや、大丈夫。行ってらっしゃい」

あきら「え、変?」

母「ううん。普通だよ、大丈夫」

あきら「いい意味で?」

母「いい意味で」

あきら「・・・本当に平気? 変えたほうがいい?」

母「いいよ、平気。大丈夫」

あきら「・・・うん」

母「行ってらっしゃい」

あきら「・・・行ってきます」

母「うん」

あきら、去る。母、あきらを見送り、食事をかき込む。

2

あきららのバイト先のネットカフェ。

舞台前方の端に受付カウンターがあり、その中に立っているあきらと福山。

福山「別に僕は自分のことかっこいいと思ってるわけじゃないの。普通かなって。あ、普通より少しだけ見やすい？　なんか、あくまで見やすいくらいなんだけど、普通よりは見やすいんじゃないかなって思っ
っっっ」

客の戸部がやってきてカードをあきららに渡す。

あきらら「あ、ありがとうございます。12時間パックで2750円です。また12時間パックにしますか」
戸部、金をあきららに渡し領く。あきらら、カードを戸部に渡す。

あきらら「かしこまりました。12時間パックでお席2階の2018号室になります。ごゆっくりどうぞ」

戸部、去る。

6

福山「ごゆっくりどうぞ」

あきらら、金をカウンター内に仕舞う。

福山「・・・あ、そう、なんか昨日も、新宿2丁目歩いてたらホストに声かけられて。ちょっと今ホスト探してるんですけど・・・って。僕は、そんな自分がかっこいいなんて思ってないし、自分がホストなんておこがましいかと思ってるタイプだから。あ、大丈夫ですっ・・・て断っただけ。本当に。だから僕って、他人から見たらかっこいいというか、見える顔？　目立つ顔？　なのかなって」

あきらら「・・・」

福山「あ、ねえ、僕ってどう？」

あきらら「・・・」

福山「かっこいいのかな」

あきらら「ああ・・・僕そういうのよくわかんないんですけど・・・不細工ではないんじゃないですか」

福山「なにそれ。そんな消極的な意見」

あきら「すみません」

福山「でも昨日の合コンでも、女の子に、なんかアイドルみたい、とか俳優に似そうとか言われて。え、そんなことないよって思って」

あきら「あ、じゃあカッコいいんじゃないですか」

福山「うーん・・・普通だと思うけどね・・・」

あきら「・・・ああ」

福山「小川くん・・・さん？　くん？」

あきら「くんでいいです」

福山「小川くんはさ・・・何歳だっけ」

あきら「22です」

福山「ああ・・・大人っぽく見られるでしょ」

あきら「ああ、はい、まあ・・・」

福山「だよね・・・え、彼女とかいるの？」

あきら「いや」

福山「そっかそっか・・・今までは？」

あきら「いや」

福山「ああ、そっか・・・え、何歳だっけ」

あきら「え、22・・・」

福山「あ、そうだ、聞いたじゃん」

あきら「はい」

福山「大学生？」

あきら「あ、はい・・・」

福山「え、どこ？」

あきら「あ、丸丸大学です」

福山「え。頭いいとこじゃん。小川くん頭いいの？」

あきら「や、普通です」

福山「え、学校は？ 休み？」

あきら「ああ・・・まあ・・・」

福山「休み？」

あきら「・・・」

福山「・・・あれ、聞いちゃいけなかった？」

あきら「いや・・・」

福山「いじめ？」

あきら「そんなんじゃないんですけど・・・」

福山「靴隠されたりとか？」

あきら「大学で靴隠す人いないと思いますけど」

福山「既読スルーとか？」

あきら「ラインの？」

福山「された？」

あきら「いや、別に」

福山「フェイスブックにあからさまな悪口書かれたりとかは？」

あきら「僕いじめられてないですよ」

福山「別に恥ずかしいことじゃないと思うよ、僕は。だって恥ずかしいのはいじめてる奴等だし。小川くんが気にして学校行かないなんて、間違ってる。そうだ、今度合コン来る？ 小川くんみたいなタイプ、
以外とうけると思うんだよね。かける言葉が思いつかない・・・って」

あきら「僕いじめられてないですよ」

福山「・・・うっそだあ、僕のクラスに小川くんが居たら、僕は小川くんをいじめてるよ」

あきら「・・・皆優しいですよ。びっくりするくらゐ」

福山「・・・怪しいな。自分の私利私欲のために通う大学で、果たして人間が他人に優しくするだろうか」

あきら「そんな人もいますよ」

福山「だって自分に置き換えてみて」

あきら「この話長いですか」

福山「自分は女の子たちと仲良くイチャイチャしたいっていう欲求のために、必死こいて勉強して、大学に行くわけだろう」

あきら「個室の掃除行ってきてもいいですか」

福山「そこで何百何千もいる生徒の中のたった一人の自分に何の利益も与えてくれない小川くんに、一体全体どうして優しくするんだ。無償の愛？ いいや、僕はそんなもの信じない。他人に与える優しきには、必ず多かれ少なかれ下心があるんだ、と思うんだ、僕は。僕はね」

あきら「個室の掃除行ってきていいですか」

福山「いいよ。一人で話してるから」

福山、話を続けている。あきら、ぞうきんとバケツを持って去る。

福山「雨の日の子猫を見て持って帰ってしまうイケメンの気持ちはよくわかる。猫大嫌いだけど。でもそれは、可愛そうな子猫を助けたいなんて純粹な感情ではなく、可愛そうな子猫を助けてる俺、かっこいいという気持ちの名のもとに起こしている行動だと思うんだ・・・」

9

3

個室が並んでいる。

あきらがぞうきんで扉を拭いたり、部屋の中の床を拭いたりしている。

2018号室から戸部が顔を出す。気付かず掃除しているあきら。

戸部「ねえ」

戸部の声が小さすぎて、気づかないあきら。

戸部「ねえ、ねえねえ」

あきら、声に気付く。

戸部「ねえ」

あきら、戸部に気付く。

あきら 「あ、はっ」

戸部 「・・・日本嫌い？」

あきら 「・・・えっ？」

戸部 「日本嫌い？」

あきら 「・・・はっ」

戸部 「嫌い？」

あきら 「はっ」

戸部 「・・・おいで」

あきら 「へっ？」

戸部 「おいで」

あきら 「今仕事なんなんで」

戸部 「変なことしないよ」

あきら 「いや、そういうことじゃないんですが・・・」

戸部、2018号室に入る。あきら、付いていく。

明かりが消える。

一つの光が舞台上に現れる。うっすらとパソコンが見える。

あきら 「暗」

戸部 「暗いよ」

あきら 「電気切れてましたか？」

戸部 「完璧についてたよ」

あきら 「なんでこんなに暗いんですか」

戸部 「気分だよね」

あきら 「ここで何してるんですか」

戸部 「世界改革」

あきら 「もう仕事戻ってもいいですか」

戸部「俺はこの世界を変えようと思ってる」

あきら「・・・ゆっくりどうぞ」

あきら、去ろうとする。

戸部「ちょっと待ちなよ高橋さん」

あきら「小川です」

戸部「日本嫌いなんでしょ。一緒に変えようよ」

あきら「・・・そこまで嫌いじゃないです」

戸部「嘘はいけないよ。奴等は全てを見てる」

あきら「お客様、すみませんが・・・」

戸部「救世主」

あきら「・・・」

戸部「救世主と呼んでくれ」

あきら「すみません、嫌です」

戸部「お父さんは好き？」

あきら「・・・は？」

戸部「お父さんは好き？」

あきら「・・・いません」

戸部「・・・そう」

あきら「だから好きかわかりません」

戸部「そうかな」

あきら「・・・」

戸部「本当にわからない？ わからないに逃げてない？」

あきら「・・・」

戸部「お母さんは？」

あきら「・・・嫌」

戸部「嫌いな気持ちを高橋さんはどうしてるの」

あきら「小川です」

戸部「名前覚えるの苦手なの」

あきら「気持なんて考えたことないです。わからない」

戸部「また、わからないだ。君は負の感情をわからないと思いいこむことで自分を抑えつけてるんだ。そう

思わない？」

あきら「・・・何を言ってるのかわかりません」

戸部「自分が悪いからと言って我慢するのは変だよ。だからって相手に変化を求めるのは自己中心的すぎる。でもこの世界には、世界、あるいは人間に対して怒りや悩みを抱えてる人が数えきれないほどいるんだ。そんなとき、みんな逃げてしまう。わからないに。楽だからね、わからないは。けれどそれでいいのだろうか」

あきら「・・・仕事に戻っていいですか」

戸部「もうすぐ人類は優秀な人間だけを残して滅びると思う。そのときに生き残れる人材になるには、我慢を捨てることだよ」

あきら「・・・誰情報ですか」

戸部「みんな言ってる。一部の人間は」

あきら、パソコンの画面を覗く。

あきら「・・・2チャンネルへの書き込みは何か効果があるんですか」

戸部「ゼロよりはある」

あきら「・・・ゼロに近い1は結局ゼロですよ」

戸部「そう言ってももしなければ、ゼロはゼロのままになる」

あきら「・・・世界改革なんて誰が望んでるんですか」

戸部「みんな望んでる」

あきら「一部の間人？」

戸部「そう」

あきら「一部の人間のみんなって、結局全体の何割ですか？」

戸部「やめろ。俺は今数学の授業をしてるんじゃない」

あきら「・・・」

戸部「なんでお母さん嫌いなのか」

あきら「・・・」

戸部「言わなくてもいいよ。言いたくないなら」

あきら「・・・」

戸部「言いたいんですよ。言いたくないなら好きって言うもんね」

あきら「・・・僕、何歳に見えますか」

戸部「60」

あきら「仕事に戻ります」

戸部「傷つけた？ ごめんね。でも傷つくことを怖がっちゃだめだよ。傷つけることも」

あきら「60の相手にあんな変なこと言ってたんですね」

戸部「人は年齢じゃないと思ってる」

あきら「・・・どうして僕を呼んだんですか」

戸部「似てる気がして」

あきら「・・・僕是世界を変えたいなんて思ってます」

戸部「どうか」

あきら「・・・本当に世界が変わったら困るのは、変えたいって言ってる人たちですよ。だから僕もお客さ

んも、世界が変わったら困ると思います」

戸部「救世主」

あきら「・・・仕事に戻ります」

戸部「高橋くんの言い分は動かないことへの言い訳にしか聞こえないよ」

あきら「・・・ゆっくりどうぞ」

あきら、去る。が、すぐに戻ってくる。

あきら「小川です」

あきら、去る。

4

ネットカフェの受付カウンター。

福山と水井薫(22)が話している。

福山「別に僕は自分のことをかっこいいと思ってるわけじゃないの。普通かなって。あ、普通より少しだけ見やすい？　なんか、あくまで見やすいくらいなんだけど、普通よりは見やすいんじゃないかなって思ってた」

薫「え、でも私は福山さんかっこいいと思いますよ、全然」

あきら、ぞうきんとバケツを持ってやってくる。福山と水井の会話を聞いている。

福山「そうかなあ。普通だと思うけどね」

薫「全然全然。だって初めて会ったとき、仮面ライダーの人みたいって思いましたもん」

福山「無理だよ。僕バイクの免許持って無いもん」

あきら「お疲れ様です」

福山「あ、お疲れ」

薫「あ、初めまして」

あきら「・・・あ、は、初めまして・・・」

薫「水井薫と申します」

あきら「あ、小川です・・・」

薫「小川さん」

あきら「あ、はい」

福山「今日から入る、水井薫ちゃん。小川くんの後のシフトだから」

あきら「あ、はい」

薫「よろしくお願ひします」

福山「一応細かい仕事は僕が教えとくから、小川くん引き継ぎだけやって」

あきら「あ、はい……。あ、あの、個室は2階全部終わってます」

薫「はい」

あきら「えっと……。あ、トイレも点検終わってます」

薫「はい」

あきら「……。あ、シャワールームの掃除は今使ってるお客さんが終わったらやってください」

薫「はい」

あきら「……。そのくらいです」

薫「はい、ありがとうございます」

福山「お疲れ。じゃああがっていいよ」

あきら「あ、はい」

薫「お疲れ様でした」

あきら「お疲れ様です……。」

あきら、ちらりと薫を見る。

福山「どうかした？」

あきら「や……。お疲れ様です」

福山「お疲れ」

薫「お疲れ様です」

あきら「あ、はい……。」

あきら、去る。

福山「……。あ、そう、なんか昨日も、新宿2丁目歩いてたらホストに声かけられて、ちょっと今ホスト探してるんですけどって」

薫「え、凄い！ それってそうとうかっこいいってことですよ」

福山「いや、でも僕は、そんな自分がかっこいいなんて思っていないし、自分がホストなんておこがましいとか思ってるタイプだから。あ、大丈夫です……。断ったんだけど。本当に。だから僕って、他人か

ら見たらかつこいいいというか、見れる顔？ 目立つ顔？ なのかなって」

5

公園。ベンチが置かれている。そこに座り、双眼鏡を覗いている荒井（21）

あきら、やってくる。

あきら「荒井くん」

荒井、双眼鏡であきらを見る。

あきら「遅くなってごめんね」

荒井、双眼鏡を外す。

荒井の隣に腰かけるあきら。

荒井「いいよ。15分も待ってない」

あきら「何してたの」

荒井「遠くで歩いている人間見た」

あきら「楽しいの?」

荒井「うん、愉快。あの人たち、僕に見られるとも知らずに呑気に歩いたり煙草吸ったりしてるんだもん。もし僕がスナイパーだったら撃たれて死んでるのにさ」

あきら「・・・荒井くんがスナイパーじゃなくて良かったね」

荒井「見る?」

荒井、双眼鏡を示す。

あきら「ここ」

荒井「そう」

あきら「・・・荒井くん、痩せたね」

荒井「そうかな」

あきら「うん」

荒井「じゃあそうかも」

あきら「学校大変？」

荒井「まあね。勉強はなんとかなるよ。講義聞いて予習と復習しとけばいいから。でも人間は無理だ。予習復習繰り返したって、毎回問題も答えも違う。・・・なんだか疲れてしまった」

あきら「・・・痩せたね、荒井くん」

荒井「・・・そうだね。あ、ノート・・・」

あきら「あ、ありがとう」

荒井、鞆の中からノートの束を出し、あきらに渡す。

荒井「3か月分」

あきら「ありがとう。ごめんね」

荒井「僕一人だいつもノート取らないから、逆に助かってる。やっぱり書いたほうが覚えるんだね」

あきら「そうなんだ」

荒井「人間って不思議だよね」

あきら「うん・・・」

荒井「・・・あきらも痩せた？」

あきら「そうかな」

荒井「まだバイトしてるの？」

あきら「うん、週5」

荒井「週5？ 凄いね」

あきら「荒井くんのほうが凄いよ。毎日大学行ってて」

荒井「僕は週5で働いてる方が凄いやと思うけど」

あきら「仕事場のほうが相手への干渉が少ないから楽なんだ」

荒井「・・・そっか・・・大学のこともお母さんには？」

あきら「・・・」

荒井「・・・言っといたほうがいいとは思っけどね」

あきら「わかってる。でも怖いんだ。これ以上がっかりされるのが」

荒井「今がっかりされてるの？」

あきら「だって一人息子がこんなだよ」

荒井「・・・とりあえずあきは1パーセントも悪くないと思うけど」

あきら「・・・これって・・・」

あきら、黙ってしまっ。

荒井「・・・病院は行ったんでしょ」

あきら「・・・小2のときだし」

荒井「でもそのときは何とも言われなかったんでしょ」

あきら「うん・・・」

荒井「・・・人と違う部分にすぐ病名をつけるのは僕は好きじゃないけど」

あきら「僕だってそうだよ。でも、病名があれば、もっと生きやすいのになって」

荒井「それは誰のための病名？」

あきら「・・・」

荒井「自分を守るためじゃなくてお母さんの世間体のために貰う名前なら、ない方がいいんじゃないの。

それに、病院に行くのはあきらが一番嫌がってたじゃん」

あきら「・・・うん」

荒井「まあ、嫌がるってことは心当たりがあるからかもだけど」

あきら「・・・こんな22歳見たことある？」

荒井「・・・あきら以外にはまだないかな・・・」

あきら「でしょ」

荒井「や、でも僕がまだ会ったことないからかもだし」

あきら「22年生きてきて会えないんじゃない、いないも同然だよ」

荒井「そんな気なことないと思うけどな・・・」

あきら「・・・ごめんね」

荒井「いや、いいよ、別に」

少しの間。

あきら「・・・お母さん、再婚したいみたいで・・・」

荒井「おお」

あきら「今日、その相手と連れ子来るんだ。あ、今何時？」

荒井「19時3分」

あきら「再婚相手と連れ子来てるんだ」

荒井「それで急に会おうって言ってきたんだ」

あきら「うん」

荒井「その人のこと嫌いなのか」

あきら「・・・いい人だよ」

荒井「連れ子って？」

あきら「24歳の女の子」

荒井「へー」

あきら「ちょっと変な人」

荒井「へー、いいじゃん」

あきら「大分変な人」

荒井「大分変か・・・じゃあ嫌だね」

あきら「・・・なんか、相手の人に悪いなと思ってさ。こんなのが息子になっちゃうの」

荒井「そうかな・・・」

あきら「ごめんね、変なこと相談しちゃって」

荒井「ううん。大丈夫」

荒井、鞆からお茶を出して飲む。

荒井「あー・・・死にたい」

あきら「あ、ごめんね、本当に」

荒井「ううん。全然。あきらのせいじゃないから」

あきら「僕はっかり話しちゃった。ごめん」

荒井「あきらの話聞きに来たんだから、いいよ」

あきら「ごめん」

荒井「大丈夫。ちょっと死にたいだけだから、気にしないで」

あきら「・・・まだ薬飲んでるの？」

荒井「うん・・・飲まないと寝れないからね・・・」

あきら「そっか・・・」

荒井「今日お昼ご飯食べたの遅かったから、お昼の分の薬飲んでなくてさ。夜飲めないと一番困るから」

あきら「ああ・・・」

荒井「・・・ちょっとしたら大丈夫だから」

あきら「うん、ゆっくりでいいよ。どうせ帰りたくないし」

荒井「うん・・・」

あきら「・・・みんな大変だね・・・」

荒井「大変じゃない人なんていないよ」

あきら「・・・そうだね・・・」

荒井、空を見上げる。あきらも空を見る。

荒井「あ・・・死にたい」

6

小川家のリビング。

母、荻原、小春（24）が、ちゃぶ台を囲み座っている。

小春「ぐちそうさまでした」

荻原「ぐちそうさまでした」

母「はい」

荻原「・・・良かったの？ あきらくん待たなくて・・・」

母「うん、いつ帰ってくるかわかんないし。あきらの分小皿にわけといたから」

荻原「19時には帰るって言ってたんだよね。僕探してこようか」

母「ううん。いい、いい。何時に帰るかわかんないって言ってたし」

荻原「心配だな・・・」

小春「あんなに大きいんだから誘拐されないよ」

荻原「誘拐は心配してないよ」

小春「じゃあ何を心配してるの」

荻原「ん・・・ほら、最近変な人とか多いし・・・」

小春「襲うならもつと小さい人を襲うんじゃないかな」

荻原「そうだけど・・・」

小春「心配?」

荻原「・・・うん」

小春「心配なフリをしただけ?」

荻原「そんなことないよ・・・」

母「あ、そうだ、お茶飲む? 入れようか」

小春「ありがとうございます」

荻原「いいよ、気つかわなくて」

母「いいのいいの。座ってて」

母、去る。

小春「・・・どこが好きなの」

荻原「・・・え、明子さん?」

小春、頷く。

荻原「えー、なんだろう・・・どこだろう・・・」

小春「ないの」

荻原「無かったら結婚なんて言わないよ」

小春「なんで好きなの」

荻原「えー・・・」

母、お盆にお茶を乗せてやってくる。

母「何の話？」

荻原「いや、なんでもない」

母「え、悪口？」

荻原「そんなわけないでしょ」

母「えー」

母、湯呑を荻原と小春の前に置く。

母「熱いからね」

小春「ありがとうございます」

荻原「ありがとう」

母、壁の時計を見る。

荻原「あきらくん遅いね」

母「あ、ね・・・何してんだか」

小春「聞いてもいいですか」

母「うん、なにになに？」

小春「あきらくんって何であんな見た目なんですか」

母「・・・」

小春「体質？」

荻原「小春」

小春「なに」

荻原「そういうことは・・・」

母「あ、いいの、ごめんね、そうだよね・・・」

あきら、やってくる。

あきら「あ」

母「あ、お帰り」

あきら「・・・ただいま」

荻原「お邪魔してます」

小春「おかえり」

あきら「・・・は」

あきら、去ろうとする。

母「あ、ちょっと待って。ご飯は？」

あきら「ご」

母「あきらの分のパエリアよけといたよ。食べなよ」

あきら「後で食べる」

母「何か食べてきたの？」

あきら「今お腹空いてない」

母「どうして。パエリアだよ？」

あきら「僕そんなにパエリア好きじゃないよ」

母「いいから食べなよ。みんな待ってたんだよ。待ちくたびれて食べちゃったけど」

あきら「待ってないじゃん」

あきら、去ろうとする。

母「あきら、待って」

あきら、止まる。

母「お茶だけ飲みな」

あきら「・・・なんで」

母「今入れるから。そこ座って。お茶だけ飲んで」

あきら「・・・」

あきら、座る。

母、台所に去り、湯呑を持って戻ってくると、あきらの前に置く。

母「熱いからね」

あきら「・・・うん」

母と荻原がお茶を飲む。

小春、息を吹きかけお茶を冷ましている。

あきらはお茶を見ている。

母「・・・今日遅かったね」

あきら「・・・うん」

母「外暗かったでしょ」

あきら「・・・普通」

母（小春に）「氷持ってこようか？」

小春「あ、大丈夫です。冷ますの楽しいから」

母、微笑む。

少しの間。

荻原「あ、あきら・・・くんは、何歳・・・だっけ？」

あきら「・・・」

母「22歳。今年卒業なの」

荻原「あ、そうだ。大変な時期だ。22じゃ、小春と1歳、2歳違い？」

母「小春ちゃん何歳だっけ？」

小春「10万88歳」

荻原「今年で24だから2歳違いか。仕事も決まったばかりで、大変なときなんだよね」

母「なんの仕事してるの？」

小春「美容師です」

母「え、凄い！」

荻原「え、なんで嘘つくの。あ、ごめん、小春は公民館の受付の仕事をして・・・」

母「あ、凄い・・・」

荻原「なんで嘘ついたの。華やかな職業に憧れちゃったの？」

小春「夢だったの」

荻原「初耳だよ」

小春「公民館の受付をやるのが夢なんて言ったことないよ」

荻原「そりゃそうだけど」

母「どこの公民館で働いてるの？」

小春「丸々小学校の近くです。ガキばっか来る」

荻原「ガキとか言わないの」

母「でも凄いね。公民館なんて、しっかりした責任感ある人しか働けないよ」

小春「前料がなければ誰でも働けます」

母「・・・」

荻原「ごめん、ちょっと、変ってる子で・・・」

母「あ、ううん。大丈夫。全然」

荻原「あきらくんは将来就きたい仕事とかあるの？・・・ですか？」

あきら「・・・」

母「漫画の編集者は？」

あきら「いつの話してるの」

荻原「あ、バイトとかしてるの？・・・ですか？」

あきら「・・・」

母「土日ネットなんかで働いてるの。なんだっけ。あの、漫画の・・・ネット・・・ネット・・・ねんど・・・」

あきら「ネットカフェ」

母「あ、そうそう。ネットカフェ。すぐ忘れちゃう」

荻原「へー、凄いね」

あきら「何がですか」

萩原「大学からバイトしてるなんて」

あきら「みんなしてます」

萩原「じゃあみんな凄いな。ぼくは大学るとき、バイトしないで遊んでばかりだったから」

あきら「・・・遊ぶ友達がないだけです」

萩原「あ・・・いや、そんなことない・・・思うよ」

あきら「・・・」

母「・・・」

小春「パン食べていい？」

萩原「え、なんで。今パエリア食べたばっかでしょ」

小春「パエリア食べたたらパン食べちゃだめなの？」

萩原「パエリア食べたたらパン食べちゃだめだよ。カロリーが駄目でしょ」

小春「でもそんなにパエリア食べてないよ」

萩原「食べてたよ。美味しい美味しいって三皿食べてたよ」

小春「なんで数えてるの」

萩原「お父さんにパエリアよそわせたじゃん、覚えるよ、そりゃ。どんだけ食うんだろう」

って覚えちゃうよ」

小春「なんでパン食べちゃだめなのか意味わかんないよ」

萩原「パン食べちゃだめなんじゃないよ。パエリアの後のパンはお止めて言ってるんだよ」

母「食べさせてあげたら？」

萩原「でも糖質が・・・若い子の生活習慣病は社会問題だよ」

小春「じゃあ生活習慣病にならないようにするから」

萩原「小春が好きに生きてたら間違いなく生活習慣病の餌食だよ」

小春「じゃあいいよ。いらないよ」

あきら「いっちなうさぎ」

あきら、湯呑を持って立ち上がる。

母「おかわりは？」

あきら「いらなこ」

あきら、去る。

母「・・・あ、ごめんね、あの子最近反抗期っぽくて・・・」

荻原「僕らが急に来たからだよ、きつと」

母「あの子には荻原さんと小春ちゃん来るって言ったから・・・」

荻原「じゃあ嫌われてるんだね・・・」

母「ううん。そんなことないそんなことない。混乱してるだけだよ。ずっと父親がいなかったから・・・」

小春「トイレ借ります」

母「あ、はい。出て右ね」

小春「はい。あ、お父さんお茶飲まないでね」

荻原「飲まないよ」

小春、去る。

母「・・・面白い子だね、小春ちゃん」

荻原「変でしょ」

母「少しね。でも素直で凄くいい子」

荻原「素直すぎない？ 母親がいない分、伸び伸び何でもやらせてあげようと思ったら演劇に手出しちゃ

っつた」

母「演劇？」

荻原「自分で脚本と演出やって劇団やってんの」

母「え、凄いな」

荻原「人前に出るのが苦手な子なのに、自分でそういう道に行っちゃうんだもん。びっくりだよ」

母「へー、凄いな。全然そんな風に見えないのに」

荻原「ね」

母「え、小春ちゃんの演劇？ って面白いの？ どんな作品？」

荻原「なんか難しいんだよね。コメディだと思うんだけど、笑っていいのか悩むっていうか・・・」
母「へー・・・」

荻原「でも娘が一生懸命作ったものを見るだけで、僕は感動しちゃうけどね」
母「だよな、それは。え、私も今度見に行きたいな。あきらも誘って」

小春「頭だけ出して母と荻原を見ている。」

荻原「あ、うん、来て来て。次11月にあるからさ」

母「え、行くよ。何て言う劇団？」

荻原「小春組」

小春、二人の会話を見ていた。

7

あきららの部屋。

携帯にイヤホンをつけ音楽を聴きながらダンスを踊っている。

両手にシュークリームを持った小春が入ってくる。

小春「シュークリーム食べる？」

あきら「わ、え、え、なに？」

小春「・・・シュークリーム食べる？」

あきら「え、なに、何で入ってきてんの」

小春「シュークリーム食べるか聞きに来た」

あきら「あ、え、の、ノック、しましたか」

小春「・・・シュークリーム持ってて出来なかった」

あきら「・・・え、入り、入りますって言いましたか」

小春「・・・さっきのって何ダンス？」

あきら「あ、は、入りますって・・・」

小春「言っていない。それ重要？ それよりさっきのダンスなに？ 振り付け自分？」

あきら「さっきのは違います。間違え」

小春「振りつけ間違えたの？」

あきら「え、違う。え、だって、個人の部屋なんだから、許可が必要ですよ」

小春「え、まだ部屋の話してるの？」

あきら「・・・」

小春「凄いね。ネチネチ星人だね。お父さんと似てる」

あきら「似てないです。他人じゃないですか」

小春「・・・」

あきら「・・・」

小春「今のは間違えたでしょ」

あきら「・・・間違えた・・・」

小春「お父さんには黙っといてあげる」

あきら「・・・え、なんで入って来たんですか。勝手に」

小春「・・・シュークリーム食べる？」

あきら「・・・いらないます」

小春「え、なんで。嫌い？」

あきら「お腹空いてないから。パエリア食べたばっかじゃないですか」

小春「あきらくんは食べてないよ」

あきら「・・・まだお腹空かない」

小春「後で食べれば」

あきら「・・・いいです、いらないます」

小春「怒ってるの」

あきら「怒ってないです」

小春「じゃあ食べなよ」

あきら「無理して食べるもんじゃないでしょ」

小春「人の善意は無理してでも受け取れよ。あとで食べればいいじゃない。何が不満だ」

あきら「そんなに好きじゃないんです、シュークリーム」

小春「シュークリーム嫌いな人間がいるわけないだろう」

あきら「僕は嫌いなわけじゃなくて・・・」

小春「ねえ、なんでそんな顔なの」

あきら「・・・」

小春「元から？」

あきら「・・・」

小春「聞いちゃいけないの？」

あきら「・・・」

小春「・・・どうして聞いちゃいけないんだろう」

あきら「・・・」

小春「お父さんも明子さんも、聞くなつて空気を出すのはなんでなの。病気なの？」

あきら「・・・」

小春「なんで誰も教えてくれないの。あきらくんが話してくれば済む話なんだけど。私気になるんだけ

ど」

あきら「・・・あ・・・えっと・・・生まれつき・・・です」

小春「ふーん。病気とかではないの？」

あきら「・・・病院で見てもらったけど・・・違いました・・・体質だと思います」

小春「なんだ。そうなんだ。なんで明子さん教えてくれなかったんだろう。ただの体質なのに」

あきら「・・・お母さんは、聞いたら傷つくと思ってる」

小春「傷つくの？」

あきら「・・・聞かないようにされる方が・・・傷つく」

小春「・・・それ言えば。明子さんに」

あきら「言っても、たぶん変わらない」

小春「・・・大学は？」

あきら「え・・・」

小春「大学なんか、気使い屋ばかりでしょ。平気なの」

あきら「・・・」

小春 シュークリームをあきらに投げる。受け取るあきら。

小春「饞別」

小春、去る。あきら、シュークリームを見つめる。

小川家リビング。

母と荻原がお茶を飲んでいる。

母「おかわりいる？」

荻原「もういいよ。5杯はきつい」

母「じゃあ私だけ飲もうかな」

荻原「よく飲むね」

母「うん。更年期かな」

荻原「この前虫歯も更年期って言ってたじゃない。何でも更年期のせいにしちゃいけないよ」

母「でも勝手に私の体を蝕んでいるのはあいつらだよ」

荻原「誰、あいつらって」

母「更年期共」

荻原「更年期に意思はないよ」

母「更年期の何を知ってるの」

荻原「いや、よく知らないけどさ・・・小春遅いなあ」

母「女子のトイレは長いものだよ。でも何故長いかは考えちゃダメ。それが女なの」

荻原「女性は難しいな」

母「男よりは簡単だと思うけど」

荻原「どっちもどっちだね」

母「・・・びっくりした？」

荻原「え？」

母「あきら」

荻原「・・・なんで、そんなことないよ、この前挨拶もしたし」

母「本当は？」

荻原「本当だよ」

母「眼鏡割るよ」

荻原「少しだけだよ、少しだけちょっとびっくりしたけど」

母「やっぱり」

荻原「ほら、距離が近かったからさ。動物園とかもそうじゃん。ぞうのコーナーを外から見分には大きいなあ・・・で済むけどさ、触れ合いコーナーでバナナあげるときは思ったより大きくてびっくりするじ

ゃない」

母「あきらはぞうのこと？」

荻原「違うよ、例えばの話だよ。思ったより、ってさ、あるじゃん、よく」

母「・・・ありがとう」

荻原「なんで」

母「ごめんね」

荻原「・・・謝るのはだめだよ。お礼も、それは駄目だよ。・・・感謝したり申し訳なく思うものじゃないですよ、子供の存在は」

母「・・・わかってるよ」

荻原「僕や小春がそんなことで明ちゃんとあきら君のこと嫌になったりするわけないでしょ」

母「・・・そうだね・・・ありがとう」

荻原「今何にありがとうって言ったの？」

母「・・・優しさ」

荻原「僕自身の優しさで間違いない？ あきら君は関係ない？」

母「うん、荻原さんの優しさ」

荻原「うん、どういたしまして」

母「ごめんね」

荻原「今のは」

母「今のは私の不甲斐無さへのごめんねだからあきらは関係ない」

荻原「明ちゃん是不甲斐無くなかないよ。子供を育てるって凄いことだよ」

母「それは荻原さんでしょ」

荻原「僕は両親とも居たし・・・あのさ、聞きづらいことを聞いてもいい？」

母「・・・あきらのこと？」

荻原「うん・・・」

少しの間。

母「・・・病院はね、あきらが小学生のときに行ったんだけど、そのときは別になんともないって言われて・・・

段々年齢が体に追い付いてくるからって言われたんだけどね・・・まだ追いついてないよね」

荻原「・・・追い越してるね」

母「小、中、高で顔のこと言われて学校行けなくなっちゃう時期があったからさ、大学も心配してたんだけど、今はなんとか行けてるみたいだし。もしか何かあったら、二十歳も超えたわけだし、もう一回

病院行った方がいいかなって考えてたんだけど」

荻原「大丈夫だよ。大学はみんな自分のことしか考えてないから」

母「そうだよね」

荻原「うん」

母「なんかさ、あんな感じだけども、私にはずっとあんな感じだったわけだからさ、あれがあきらなの」

荻原「うん」

母「だから・・・可愛くてさ、やっぱり。年頃だからさ、洋服に気を使ったり髪の毛いじったりさ、ああ、年頃なんだなあって」

荻原「うん」

母「だからさ、あきらが楽しく過ごせるようになったらなってさ・・・見た目とかじゃなくて」

荻原「・・・大丈夫だよ。美人は三日で飽きるって言うし」

母「うん・・・ん？」

荻原「ん？」

母「え？」

荻原「あれ、知らない？」

母「あ、言葉は知ってる」

荻原「うん、だから見た目なんかそんなもんだよねって」

母「ああ・・・うん」

荻原「わからなかった？」

母「雰囲気はわかった」

荻原「え、内容はわからなかった？」

母「や、わかったわかった」

荻原「本当？」

母「小春ちゃん遅いよね」

荻原「そうだよ、遅すぎるよね」

母「あきららのとこ居るのかな」

荻原「あ、そうかも。気になると放つとけない子だから。探してくる」

母「いいいいいよ、あきらも話した方がいいでしょ、お姉ちゃんになるんだから」

荻原「あ、そっか。小春がお姉ちゃんか・・・心配だな・・・」

母「大丈夫だよ、しっかりしてるし」

荻原「え、そうかな・・・あ、シュークリーム」

母「え？」

荻原「明ちゃんとあきらくんってシュークリーム買って来たんだよ」

母「え、本当？」

荻原「あれ、どこ置いたっけ・・・」

母「え、忘れたの？」

荻原「いや、持ってきたよ。玄関入る時に持ってたのは覚えてるもん」

母「え、どこ置いたの？」

小春、帰ってくる。口の周りにクリームが付いている。お茶を飲みほす。

荻原「遅かったね、あ、ねえ、シュークリームって・・・」

小春「もう芝居来なくてもいいよ。無理しないで」

荻原「え・・・小春シュークリーム食べたでしょ」

小春「楽しみ方わかんないのに無理して芝居観ないでいいよ。ただの親子っただけで」

荻原「え、シュークリーム食べたでしょ」

小春「ごちそうさまでした。お邪魔しました」

荻原「2個食べちゃったの？」

小春去る。

母「また来てねー」

荻原「ごめんね」

母「ううん。ありがとう、また来て」

荻原「うん」

荻原、去る。母、食器をかたす。

8

ネットカフェ。

受付カウンター内にあきらと薫がいる。

薫「福山さん大丈夫ですかね、なんか病院で、胃炎って言われたみたいで。福山さんみたいな人でも悩みあるんですね」

あきら「ああ・・・そうですね」

薫「悩みなさそうなのに」

あきら「ああ・・・」

少しの間。

薫「あ、私、先週誕生日だったんですよ」

あきら「あ、おめでとうございます」

薫「ありがとうございます」

あきら「何歳に・・・」

薫「22歳になりました」

あきら「あ、同い年だ」

薫「えー？ そうなんですか!？」

あきら「はい、先々月22になりました」

薫「えー、もっと年上かと思ってました」

あきら「・・・老けてますからね」

薫「いやいやいや、大人っぽいってことですよ。羨ましいです。私は未だに高校生に間違われるから」

あきら「そっちの方が羨ましいです。僕は高校生のときから50代に間違われてたから」

薫「あははははははは！・・・あ、ごめんなさい・・・」

あきら「や、笑ってくれたほうがいいです」

薫「小川さん面白いですね」

あきら「初めて言われました」

薫「え、そうなんだ、え、面白いのに」

あきら「あ・・・仕事は慣れましたか」

薫「あ、はい、ぼちぼち」

あきら「あ、良かった」

薫「・・・敬語やめない？ 同い年なんだし」

あきら「あ・・・はい、うん」

薫「うん」

薫 小さく笑う。

薫「・・・小川くんは大学行ってるの？」

あきら「ああ、まあ」

薫「どこ？」

あきら「丸丸大学」

薫「丸丸大学？ 凄っ。頭いいとこじゃん」

あきら「まぐれ、まぐれで入れた・・・」

薫「まぐれじゃ丸丸大学入れないよ。凄い。小川くん頭いいんだね」

あきら「別に・・・普通・・・あ」

戸部、来る。

薫「ご精算でよろしいですか？」

戸部、あきらをじろりと見てから薫に目をやる。

戸部「また同じバックで」

薫「かしこまりました。12時間バックで2750円になります」

戸部、財布から金を出し、薫に渡す。

薫「ありがとうございます。3050円お預かりしましたので・・・300円のお釣りになります。カード

のご提示お願いします」

戸部、カードを薫に渡す。

薫「ありがとうございます。では先ほどと同じで・・・12時間バック、お部屋は地下2階の2018号室になります。ごゆっくりどうぞ」

薫、カードを戸部に返す。

あきら「ごゆっくりどうぞ」

戸部、あきらを含み笑いしながら見て、去る。

あきら「・・・」

薫「あの人ずっといるね」

あきら「あ、はい、ね」

薫「いつからいるの？ あ、小川くんいつからここでバイトしてるの？」

あきら「ここは1年ちょっとくらい。僕来たときからもうあの人住んでたよ」

薫「やっぱり住んでるんだ。いいの、それって？ 法律的には」

あきら「わかんない」

薫「私一人暮らしだからさ、そういうの許せなくて。安いでしょ？ ここ住むの。破格だよ。それが許

されるならみんな住んじゃうじゃんね。・・・あ、ごめん、なんかお金にがめついみたいだよ。これじゃ。

あ、がめついってって思った？」

あきら「あ、や」

薫「私今お金貯めててさ。やりたいこと見つかったときのために。勉強したいこととかなかったから大学

も行ってなくて。がめついわけじゃないんだよ、大事にしてるの」

あきら「あ、うん」

薫「実家静岡なんだ」

あきら「静岡・・・」

薫「そう、静岡」

あきら「お茶・・・」

薫「そう、お茶」

薫 笑う。あきら、つられて笑う。

薫「小川くん面白い」

あきら「そうかな・・・」

薫「うん、面白いよ。普段からそうしてればいいのに」

あきら「え・・・」

薫「絶対いいと思うけどな」

あきら「・・・」

薫「あ、ごめん、あんまり話すの嫌い？」

あきら「ううん、そんなこと・・・」

薫「良かった」

あきら「・・・バイトって、他に何かしてる？」

薫「うん、スタバとドトールとめいどりーみん」

あきら「あ、全部カフェだ」

薫「カフェが好きなの」

あきら「へー」

薫「ふふふふふ。本当に小川くん面白いな」

あきら「え・・・」

薫「ヤバスだよ」

あきら「やばす・・・」

あきら、壁の時計を見る。

あきら「あ、トイレの掃除・・・」

薫「あ、うん、お願いします」

あきら「うん」

あきら、ぞうきんとバケツを持って去る。

ネットカフェのトイレ。掃除をしているあきら。

荒井がやってくる。

荒井「お、あきら」

あきら「荒井くん。どう、初のネットカフェは」

後ろを向き、小便を始める荒井。放尿の音が流れる。

荒井「結構いい。すぐ隣にいるのに誰もみんな一人な感じが」

あきら「荒井くんは気に入ると思った」

荒井「ありがとう。割引してくれて」

あきら「ノートのお礼」

荒井「なんかあきらが働いてるの見るの変な感じ」

あきら「えー、なんで」

荒井「え、なんか変だよ、わかんないけど」

あきら「変じゃないよ。ちゃんと働いてるよ」

荒井「いや、わかってるけどさ。・・・というか、僕もバイトしようかな」

あきら「どこで?」

荒井「ううん。違うところ。僕は接客出来ないからさ。品出しとか、工場内作業とかで」

あきら「あ、いいんじゃない。いいと思うよ」

荒井「ね」

小便の音 止む。荒井、ズボンを閉める。

荒井「あきら夜までバイトなんですよ」

あきら「うん。だいたい受付にいる」

荒井「帰るときまた声かけるね」

あきら「うん」

荒井「じゃ、頑張って」

あきら「うん、ありがとう。ごゆっくりどうぞ」

荒井、去る。トイレから戸部が出てくる。

戸部「あの子しょんべん長いね」

あきら「うわ」

戸部「あの子は友達?」

あきら「あ、はこ」

戸部「受付の子は彼女?」

あきら「え、いや・・・」

戸部「仲良さそうだったね。好きなの？」

あきら「は？」

戸部「女性の上辺を信じないほうがいいよ。外見とかじゃなくて、表情、仕草、言葉、どれも本心だと表せるものはないから」

あきら「・・・」

戸部「ヒントをあげるよ」

あきら「何の？」

戸部「女性は嘘をつくとき8割の確率で笑ってる」

あきら「・・・」

戸部「ちょっと考えたでしょ。え、好きなの？」

あきら「・・・ごゆっくりどうぞ」

戸部「世界改革には女性の力も必要なんだ。女性の笑顔と涙は武器になる。彼女にも聞いてみてよ。日本
41
が嫌いか」

あきら「・・・ごゆっくりどうぞ」

あきら、去る。

受付カウンター。薫 無表情に爪を弄っている。

隠れてそれを見ているあきら。

薫 あきらに気付く。

薫「お疲れ様」

あきら「あ、お疲れ様です」

薫「なんかさ、すっごい乾燥してるよね、ここ。私食道 食道？ 喉か、喉弱くてさ」

あきら「・・・」

薫「・・・大丈夫？ 何かあった？」

あきら「・・・いや」

薫 笑顔になる。

薫「良かった。あ、掃除終わった？」

あきら「あ、はい、うん、下は全部」

薫「ありがとう。あ、小川くん休憩入れば？」

あきら「あ、うん」

あきら、去る。

9

小川家リビング。母が座っている。

あきら、入ってくる。

あきら「新聞まだポストに入ってたよ」

母「あ、おかえり。ありがとう」

あきら「ただいま。新聞朝に取らなかったの」

母「あきら、そこ座って」

あきら「え、何で」

母「いいから」

あきら「なに、なんで」

母「いいから。とりあえず」

あきら「・・・」

母「あきら」

あきら、母の前に座る。

少しの間。

母「・・・お昼、電話あったんだけど」

あきら「・・・うん」

母「大学から」

あきり「・・・」

母「あきら来てないって」

あきり「・・・」

母「お母さん聞いてますかって」

あきり「・・・」

母「お母さん何も聞いてなかったから、え、本当ですかって・・・嘘でわざわざ電話なんてしてこないのに

さ・・・え、本当ですかって」

あきり「・・・」

母「・・・本当ですか？」

あきり「・・・」

母「大学・・・行ってないの？」

あきり「・・・」

母「・・・何か言われた？　された？　嫌なこととかあったの？」

あきり「・・・なら」

母「お母さん、大学の人に言ってあげるから・・・」

あきり「ないから」

母「別にいいんだよ、変なことじゃないんだから。嫌なら嫌って大学に言えば・・・」

あきり「だから何もないから・・・そういうのをやめて」

母「なに、そういうのって」

あきり「・・・」

母「あきらを心配して言ってるんだけど」

あきり「・・・うん」

母「・・・なんで行けないの」

あきり「・・・」

母「お母さん一緒に行けば行ける？」

あきら「やだ」

母「・・・」

あきら「そういうのは嫌だ」

母「・・・何か言われた？」

あきら「・・・なに、何かって」

母「・・・言われてないならいいから」

あきら「何かって何」

母「・・・」

あきら「・・・」

母「・・・見た目のこととか」

あきら「・・・お母さんは気にしてるってこと」

母「違うよ」

あきら、立ち上がり去ろうとする。

母「待って、違うよあきら」

母が止める。

母「あきら待って、お話しよう」

あきら「もういいよ」

母「ちゃんと話そう」

あきら「ちゃんとして何」

母「これからのことだよ。あきらが過ごしやすいように、これからのことを考えていこう。じゃないと、ずっとあきらが我慢しなきゃいけなくなっちゃうから」

あきら「・・・」

母「良くないよ、良くないから」

あきら「さっさと」

母「良くないってばー」

あきら「・・・」

あきら、俯く。

母「・・・あきら、一回座ろう」

あきら「・・・お母さんさ」

母「うん」

あきら「・・・なんでこんなんで産んだの」

母「・・・」

あきら、沈黙を壊すように歩きだして去る。

母「病院」

あきらの足音が止まる。

母「病院、行こうか」

10

公園。

ベンチの上で新聞紙を広げている戸部。新聞紙の上で横になるが、気に入らないらしく起き上がる。地面に新聞紙を広げ、その上に横になり、ベンチに足を投げ出す。

あきら、とぼとぼと歩いてくる。あきら、戸部に気付かず、ベンチに座る。

戸部「・・・こんばんは」

あきら、声の主を探し辺りを見回す。

戸部「何してんの、こんなところで」

あきら、戸部に気付く。

あきら「・・・何してんですか」

戸部「まずは俺の質問に答えたらどうだい。こんなところで何してんの」

あきら「・・・家出」

戸部「家出？」

あきら「・・・散歩かもしれない」

戸部「その辺の意識はちゃんとしなよ。家から出たときの気持ち次第で、1メートル進もうが1万キロ離れようが、家出にも散歩にもなるんだから」

あきら「・・・じゃあ気持ちは家出です。でもちょっとしたら帰るつもりです」

戸部「ちょっとって？」

あきら「・・・3時間くらい」

戸部「それは散歩だ」

あきら「夜は怖いし」

戸部「家出する人間が夜を怖がってはためだ」

あきら「・・・お客さんは何してるんですか」

戸部「ここはネットカフェじゃないよ。今は客じゃない。救世主って呼んでくれ」

あきら「戸部・・・戸部さんでしたよね」

戸部「本名はね」

あきら「本名を聞いてるんです」

戸部「戸部光明」

あきら「戸部さんはなんでここにいますか」

戸部、ベンチに座る。

戸部「お金がなくなってますって」

あきら「え、無くしたんですか？」

戸部「いや」

あきら「盗まれたとか？」

戸部「違うよ。働かないでいたらお金が無くなってしまったんだ」

あきら「それは無くなりますね」

戸部「今日はここで寝ようと思って」

あきら「え、ここで？ 虫に刺されますよ」

戸部「いいよ、それで小さな命が生きながらえるなら」

あきら「・・・変な人って言われませんか？」

戸部「よく言われるよ。でもそれを言った人間は、自分の凝り固まった価値観の中からしか俺を評価してない。そんなちっぽけな力しかない言葉に惑わされるほど、俺は弱くない。そいつらには言わせておけばいい。言うことしか出来ない人間たちだから」

あきら「・・・なんか凄いですね」

戸部「ありがとう。褒められるのは好きだよ」

あきら「・・・どうしたら強くなれますか」

戸部「強くなろうとしないことじゃないかな」

あきら「・・・」

戸部「だから今日はとことん弱い日でいいんじゃないか」

あきら「・・・僕、何歳に見えますか」

戸部「58」

あきら「22です」

戸部「・・・」

あきら「僕、22歳です」

戸部「マジでっ」

あきら「見えないですよね」

戸部「ちよっと努力してみるよ」

あきら「あ、いいんです。見えないのはわかってます」

戸部「・・・何かの病気？」

あきら「・・・わかりません」

戸部「名前を教えてください」

あきら「・・・僕の？」

戸部「そう」

あきら「小川あきら」

戸部「あきらっ？」

あきら「はっ」

戸部「羨ましいな。俺の好きなマンガにアキラってのがあるんだ」

あきら「ああ・・・」

戸部「どうだい、あきらで生きる人生は」

あきら「え、あ・・・普通です」

戸部「そうか、普通か。いい・・・」

あきら「・・・」

戸部「俺はね、ちょっと変なんだ」

あきら「さっきよく言われるって言ってたじゃないですか」

戸部「それは俺が作り出した見せかけの変だろう」

あきら「っ？」

戸部「変な人を演じることで、本来の自分に誰も気づかないようにしてるだけなんだ」

あきら「・・・どこまでが戸部さんの言葉ですか」

戸部「ここから全部戸部さんの言葉だよ」

あきら「はあ・・・」

戸部「俺はね、よく怖くなるんだ。生きることが。人の中で生きることがね。電車に乗るとどう立ってればいいのかとか、どんな顔して座ればいいのかとか、スーパーでも品物より人の目が気になっちゃう。考えすぎて思われても、無意識のうちに考えちゃうんだから、どうも出来ない。常に不安の中で生きてる。

だから何かを変えようとしてる人間っていうのは、非現実で落ちつくんだ。救世主を演じてるときだけ、

俺は無意識を捨てられる」

あきら「・・・」

戸部「・・・あきらは、22歳か・・・俺ね、子供がいるんだ」

あきら「え」

戸部「・・・いると思うんだ」

あきら「いると思う？」

戸部「彼女は強い人だから」

あきら「・・・子供に会いたいですか？」

戸部「・・・わかんない」

あきら「わかんないに逃げた」

戸部「・・・そうだね。逃げるしかないよね」

あきら「何歳ですか？」

戸部「俺？」

あきら「子供」

戸部「・・・10歳くらいかな」

あきら「10歳」

戸部「15歳くらいかも」

あきら「どっちですか」

戸部「もしかしたら本当は俺に子供なんていなかったのかもしれない」

あきら「戸部さんですか？」

戸部「今ちょっと救世主」

あきら「・・・」

戸部「・・・帰らないの」

あきら「・・・帰りたくない」

戸部「・・・」

あきら「・・・朝まで一緒に居てもいいですか」

戸部「・・・鏡見てからいいなよ、そういうことは」

あきら「変なことしませんから」

戸部「当たり前だよ。変なこととしていいのは20代の可愛い女の子だけだからね」

あきら「・・・明日バイト終わったら帰ります」

戸部「バイトは行くんだね」

あきら「あそここの人は僕を気にしてないから」

戸部「・・・そうかな」

あきら「え」

戸部「や、いいけどさ」

あきら、空を見上げる。

戸部も見上げる。

11

ネットカフェ。受付カウンター内に立っている福山と薫。

福山「別に僕は自分のことかっこいいと思ってるわけじゃないの。普通かなって。あ、普通より少しだけ

見やすい？　なんか、あくまで見やすいくらいなんだけど、普通よりは見やすいんじゃないかなって思

ってる」

薫「へー・・・あ、小川くんから連絡ありました？」

福山「ない。遅刻かね」

薫「よくあるんですか？」

福山「いや、僕が知る限り初めてだね。真面目な子だもん」

薫「大丈夫ですかね」

福山「まあそんな時もあるよね、人間だから。あ、薫、そういえば昨日・・・」

福山、ズボンのポケットからブラジャーを出す。

福山「僕の家忘れてったよ」

薫「何してんのー！」

薫、ブラジャーを取り上げ、隠す。

薫「仕事場でこういうの出さないですよ。バレるじゃん」

福山「え、隠すの？」

薫「付きあってんのバレると結構めんどうじゃん」

福山「というか昨日ノーブラで帰ったの？」

薫「今その話いいでしょ。小川くん来たらどうするの」

福山「まだ来ないんじゃない？ ってかなんで小川くんなの」

薫「え？」

福山「なんか僕が来ないうちに小川くんになってる」

薫「ああ、同じ年だから」

福山「え、小川さんと薫同じ年なの！？」

薫「そう。びっくりだよね」

福山「見えねー」

薫「ねえ、あれって病気なの？」

福山「顔？」

薫「うん。なんか体が早く年とっちゃうみたいなの」

福山「え、わかんね」

薫「え、あるじゃんそういうの。テレビでやってたじゃん」

福山「あ、世界仰天ニュースでやってた？ あの扇風機おばさんの回のだよね」

薫「そうそうそう。・・・ずっと？」

福山「うん。一年半？ くらい一緒だけど、ずっとあの顔」

薫「ふーん・・・うつるのかな」

福山「え？」

薫「病気だったらさ、うつったりするのかな？」

福山「えー、それはないだろ。それだったらバイトしないだろ」

薫「そうかな」

福山「そうだよ。それは許可しないよ、国が」

薫「うーん・・・そっか」

福山「・・・今日来る？」

薫「今日も？」

福山「やだ？」

薫「外泊多いと親が怒るんだよね」

福山「一人暮らしでしょ」

薫「バレたか」

福山「泊まるの嫌なら終電で帰れば」

薫「終電で帰るなら泊まるよ」

福山「じゃあ泊れよ」

薫「じゃあ泊るよ」

笑い合う薫と福山。後ろから二人を見ているあきら。去る。

12

公園。スーツの荻原がベンチに座っている。手にはサンドイッチがあるが、食べていない。

戸部、やってきて隣に座る。

戸部「・・・何ですか？」

荻原「・・・えっ？」

戸部「中身、何ですか？」

荻原「あ、ああ・・・たまごです」

戸部「ああ、いいですね、たまご」

荻原「・・・あ、はい」

戸部「自分は昔からたまごが大好きで、でもたまごって一日に3個までしか食べちゃだめじゃないですか。

よく食べすぎて体がかゆくなっちゃったりして・・・ああ、たまごかあ・・・懐かしいなあ・・・たまご」

荻原「・・・食べますか？」

戸部「え、いいんですか？」

荻原「はい、なんか僕今食欲なくて・・・」

戸部「そりゃ大変だ。いただきます」

荻原「あ、はい、どうぞ」

荻原、戸部にサンドイッチを渡す。

戸部「ありがとうございます。まさかいただけると思わなかったな」

戸部、食べ始める。

戸部「ああ、たまごだあ・・・」

荻原、大きなため息をつく。

戸部「リストラですか」

荻原「え」

戸部、荻原のスーツを指す。

荻原「あ、ああ、いえ、そういうのでは」

戸部「会社は？」

荻原「休みました。働く気になれなくて。早く休むって連絡しないと」

戸部「まだしてないんですか」

荻原「しようしようと思っていたら時間が過ぎてしまい、そうしたらお腹が空いてしまい、

でも食べる気にはならなくて・・・」

戸部「そのままだとゴミ人間ですよ。どうしたんですか」

荻原「たいしたことじゃないんです」

戸部「じゃあ聞かないでもいいですか」

荻原「息子が帰って来ないんです」

戸部「ほう」

荻原「あ、血が繋がってるわけじゃないんですけどね、というか、まだ息子じゃないんです、また」

戸部「もう聞かないでいいですか」

荻原「お母さんを取られたって思うんですかね」

戸部「その話長いですか」

荻原「サンドイッチ食べたじゃないですか」

戸部「くださいなんて言っていないですよ」

荻原「でも食べたでしょ。食べたってことは交渉成立してますよね」

戸部「交渉内容も知らせずに成立しないですよ」

荻原「あなた、お子さんいますか？」

戸部、そっぽを向く。

荻原「僕はね、娘がいるんです。24歳の。妻は娘が7歳のときに病気で亡くなって……。男手一つで……」

あ、ときどき母さんとか近所の方に手伝わってもらったから一つじゃないか」

戸部、服の中から新聞紙を取り出す。ポケットから宝くじを出し、新聞紙と見比べる。

荻原「……息子になる子ね、ちょっと変わってるんです。いい子なのはわかるけど、ちょっと変わってて……」

僕、どういう態度をとればいいのかわからなくて。でもこのわからなさは、息子がどうかじゃなくて、

息子が出来ることへの不安かもしれない。自分で自分がわからないんです……。あ、でも、嬉しいのは

わかるんです。家族が増えることが嬉しいのは……」

戸部「あ」

荻原「え？」

戸部「あ、あああ、あ」

荻原「え？」

戸部、荻原に新聞紙と宝くじを見せる。

13

小川家リビング。母がお茶を飲んでいる。上半身にパジャマのズボンを首に巻いていて、下半身にパジャマの上をはいている。

母、お茶を飲み切るような動作をする。

母「・・・あ、入ってなかった」

湯呑を置く。

母「お茶お茶・・・あ、いや、お茶はいいや・・・」

母、立ち上がる。壁の時計を見る。溜息をつき、自分の服を見る。

母「あ、なんだこれ・・・なんだ、なんで・・・あ・・・」

母、履いているパジャマの上を脱ぐ。

チャイムが鳴る。

母「え、え、やだ、なんだ・・・」

母、首に巻いているズボンを取り、履く。

小春の声「お邪魔していいですかー」

母「小春ちゃん？」

小春の声「そうです」

母「あ、ごめんね、今行くから」

母、パジャマの上を着ようとする。

母「あ、これパジャマじゃん。着替えなきゃ」

母、ズボンを脱ぎ、下着姿のまま服を探す。

母「なんかないか、なんか・・・」

小春、やってくる。

小春「お邪魔します」

母「あ、入ってきちゃった」

小春「・・・ごめんなさい。だめだった」

母「あ、ううん。小春ちゃんが不快じゃなければいいの」

小春「あ、はい。そこまでそんな・・・」

母「あ、お茶入れる？ あ、待って、服着るから」

小春「それがいいと思います」

母「ごめんね」

母が去っていくと、座る小春。

母、下着の上からエプロンを巻きながらやってくる。

母「ごめんね、こんな格好で」

小春「あ・・・はい・・・あ、いや、それはどうだろう・・・」

母「何着たらいいかわかんなくて」

小春「パジャマとかで良かったのに」

母「あ、パジャマがいい？」

母、エプロンを外そうとする。

小春「あ、ううん。大丈夫です、それで」

母「あ、うん」

小春「・・・あきら君は」

母「ああ、まだ」

小春「そうですか」

母「・・・あ、お茶飲む？」

小春、頭をふる。

母「じゃあ私だけ飲もうかな」

小春「おせんべありますか」

母「あるよ。食べる？」

小春「じゃあおせんべいだけ」

母、台所からお茶とせんべいを持ってくる。

母「雪の宿だけど大丈夫？」

小春「なんで？」

母「あきららは雪の宿あまり好きじゃないの。せんべいのくせに甘いなんてって」

小春「そこがいいのに」

母「ねえ。そこがいいのに」

小春「いただきます」

小春、せんべいを食べ始める。

母「お父さんは仕事？」

小春「わたしの？」

母「うん、荻原さん」

小春「仕事です」

母「そう。・・・ごめんね、心配かけて」

小春「家族になったらこの先ずっとですよ」

母「そうだね。ありがとう」

小春「・・・」

母「大学、行ってなかったの、あきら」

小春「ああ・・・」

母「何も教えてくれなかった。何かあったはずなのに・・・。なにか言われたりしたのかな・・・辛いことと

か」

小春「言われたかはわからないけど、思う人はいると思います。少なからず」

母「うん・・・。どうして普通に接してくれないのかね。あきらだってただの普通の22歳の男の子なの

に。就職難の」

小春「・・・」

母「ごめんね。小春ちゃんにこんな相談しても困っちゃうよね。あ、小春ちゃん今日仕事は？」

小春「ないです」

母「お休み？」

小春「クビになりました」

母「クビー？」

小春「上司の陰口を目の前で言ったら、もう仕事来るなって」

母「それはそうなるね・・・」

小春「・・・明子さんは、あきらくんが嫌いですか」

母「え・・・なんで？」

小春「病院、どうして行こうと思ったんですか。病名があればあきらくんが生きやすいと思った？」

母「違うよ、嫌いだからとか、病気とかそういうのじゃなくて・・・なんだろう・・・これからのあきららのことを考えると、一度病院行つともいいかなって。あきららは普通なんだってわかった方が、みんな、あきら自身もいいかなって」

小春「・・・どうしてあきらくんを普通普通って言うのかわからないな。自分の子が一番じゃないのかな。

わかんないけど。普通に思おうとしてるんですか？」

少しの間。

小春「・・・怖いの？」

母「え？」

小春「あきらくんが」

母「どうして。怖いって、どこが？」

小春「・・・あきらくんのこと、普通と思えないんじゃないですか？ 普通の子に思えないんじゃないです

か？ 変な目で見えるなって周りに思うけど、本当は自分が思ってるんじゃないですか？」

母「違うよ」

小春「・・・」

母「違う」

小春「・・・私、変わってるってよく言われるんです。面白いなら人気ものだけど、変り者だから友達はいません。でも、みんな悪口とかだけは話してくれるんです。仲間に入れてくれるんです・・・大っ嫌い、そういうの。自分だけ悪くならないから私も共犯にしようとしてき。一昨日同僚と、上司についての悪口言ってた子が、昨日は上司と同僚についての悪口言ったりして。今日は上司と同僚が、私の悪口言ってるんです。あの子頭おかしいよねって。だから頭おかしいならおかしいなりに仕返ししてやろ

うと思って、上司と同僚の前で、お互いがお互いの悪口言ってるぜって教えてあげたんです。スカッとしました。もう来るなって言われたけど、もう来るなって言われる前に、もう来てやるもんかって思ってたから、私は何もどこも痛くないんです」

母「・・・」

小春「・・・あ、何の話だっけ・・・わかりましたか？」

母「・・・うん」

小春「凄い。わかったんだ」

母「わかってるつもりなの。私は。だからわからないのがわかんないの・・・」

小春「・・・はい」

母「あきらが大事なのはわかるの。でも、それが、この気持ちだが、親だからあるものにしたくて。あきらを見た目のこと、何とも思いたくないのに、何か思ってる自分が居て・・・あきらと同年代の子を見ると・・・ああ、なんでかな、とか思っちゃったりして・・・でもそれはいけないことなんでしょ、たぶん。自分の子供は無条件で可愛くなぎゃいけないんでしょ、どうして家の子が、とか寝起きに見るとびっくりしちゃうとか、だめなんでしょ・・・」

小春「・・・」

母「母親失格だよね・・・あきらのこと親に見せたくないと思っちゃうし、職場で聞かれても写真嫌いな子だからとかさ・・・嘘ばっかり・・・嘘ばっかついて、あきらのこと傷付けてるの・・・昨日ね、なんでこんなんで産んだんだってあきらに言われて・・・ショックだった。私も思ってたの、なんでこんな顔で産んじゃったんだろうって・・・煙草のせいかなとか、お酒のせいかなとか、一人で病院行ったりしてさ・・・親の私が思ってるんだもん、あきらだって思うよ、あきらが一番思ってるよ・・・なのに・・・」

小春「水を飲んで！」

母「え」

小春「水を飲みましょう！」

小春、鞆からミネラルウォーターを出す。

母、飲む。小春も飲む。

小春「落ち付きましたか」

母「・・・うん、ありがとう」

小春「水は昔から万能薬って言われてるんです」

母「凄いね、水・・・」

小春「私たちの生活は、いつも水に守られてきたんです」

母「尊敬しちゃうな」

小春「・・・あきら君、明子さんのことわかってますよ。さっき明子さんが言ったこと、あきら君も思ってます」

母「・・・」

小春「親子ですね」

母「うん」

小春、母、せんべいを食べ始める。

小春、やがてむせる。

14

公園。新聞紙が破り捨てられている。

ベンチに座っている荻原。

戸部はベンチの下でうなだれている。

荻原「・・・期限切れなんて・・・外れより辛いですね」

戸部「・・・うん」

荻原「元気出してくださいよ」

戸部「元気なんて出ないよ。この先どうやって生きていけばいいか皆目検討がつかない」

荻原「働けばいいんじゃないですか」

戸部「働くのが嫌いだ」

荻原「・・・ありゃ」

戸部「・・・凄いですね、働いて、娘さんの分も稼いで、次は息子も出来て、来年くらいには二戸建てローンに手を出すんですか」

荻原「あ、その予定です」

戸部「凄いな・・・。一戸建てなんて・・・いくらだろう・・・」

荻原「4000万くらいです」

戸部「おえええー」

荻原「大丈夫ですか!？」

戸部「よ、4千万・・・4千万? 4千万っていくらですか・・・?」

荻原、笑う。

戸部「面白いですか」

荻原「はい、とても」

戸部「そうですか」

荻原「・・・家族はいますか?」

戸部「・・・いるかもしれません」

荻原「・・・居たらいいですね」

戸部「・・・はい。居たら嬉しいです・・・寂しくなるときがあるんです。自分が死んだあとに、何も残らないこととか」

荻原「はい」

戸部「だからネットにたくさん書き込みをしたりするんです。でも、それは自分じゃないんです。ネットの中にいる自分なんです。自分じゃない自分で痕跡を残す虚しさ、ときどき耐えられなくなるときもあります。・・・でも、それをやめるのはもつと寂しい気持ちになると思うんです」

荻原「はい」

あきらがとぼとぼ歩いてくる。

荻原「あきら君?」

あきら「あ・・・」

荻原「大丈夫？ どこ行ってたの？」

戸部「知りあいですか？」

荻原「あ、さっき話した息子です」

あきら「え」

荻原「あ、息子になる子です」

戸部「あきらのことだったんだ」

あきら「なんで戸部さんと荻原さん・・・」

荻原「知りあいですか？」

戸部「仲間です」

荻原「怪我とかしてない？ まだ明子さんに連絡してないよね」

あきら「・・・」

荻原「心配したんだよ、どこに居たの？」

戸部「喋りすぎじゃないかな。あきらが何も言えませんが」

荻原「あ・・・ごめん」

あきら「いえ・・・」

戸部「バイトは？」

荻原「え？」

戸部「あきらかに聞いたんです」

荻原「あ、すみません」

あきら「・・・休みました」

戸部「家にも帰らずバイトも休んでどこに居たんだい」

あきら「歩いてました」

戸部「まあ、座るっ？」

あきら「・・・」

あきら、荻原と戸部の間に座る。

戸部「狭いな」

萩原「お腹空いてない？」

あきら「・・・」

戸部「お腹空いてない？」

あきら「聞こえています」

戸部「じゃあ返事をしなよ。落ち込んでるからって無視はよくない」

萩原「あ、いいですよ」

戸部「何がいいんですか。今の良かったですか？」

萩原「良くはないですが・・・」

あきら「お腹空いてるかわかりません」

戸部「なんだそれ」

あきら「もうそういうの無くなりました」

戸部「悟りの境地だね」

萩原「何かあった？」

あきら「・・・」

萩原「あ、話したくないならいいんだよ、話さなくて」

戸部「話したくないならそういうの無くなりましたなんて変なこと言いませんよ。聞いてほしいんですよ、何があったか」

萩原「そうなの？」

戸部「ね」

あきら「・・・僕のこと・・・気持悪くないですか」

萩原「どうして？」

あきら「・・・」

萩原「びっくりはしたけど」

あきら「・・・」

荻原「でもびっくりだけだよ。びっくりは、気持悪いじゃないよ」

あきら「・・・」

あきら「・・・僕のこと、普通に思ってると思ってた人が、気持悪いと思ってたんです・・・」

荻原「・・・」

あきら「わかってたけど・・・そういう人がたくさんいることは・・・でも・・・目の当たりにしたのは初めてで・・・もしかしたら、お母さんもそうなのかもしれないよ」

荻原「明子さんはそんなこと思ってないよ」

あきら「でも、病院行こうって・・・それって、変ってことじゃないですか。変だと思っから病院に行くでしょ」

荻原「・・・あのね、健康診断ってあるでしょ」

あきら「えっ？」

荻原「健康診断ってあるでしょ。健康診断は、健康な人だっ行くんだよ。だってあれは予防も兼ねてるから。変なところがないかを見るんだよ。変なところがあるから見るんじゃない」

あきら「・・・」

荻原「ね？」

あきら「・・・」

荻原「あきら君は検診かもしれない、でも明子さんの健康診断じゃないかって。字が違うの。いい？ 見て？（手の平に字を書きだす）あきら君は、検査の診察、でも明子さんは健康の診断なの」

あきら「・・・」

荻原「ね？」

あきら「・・・」

戸部「わかってほしいとだけだよ。わからせてもらおうなんてわがままな考えはやめるんだ」

荻原「え、わからなかった？」

戸部「いいえ、わかっていますよ。あきはわかってる。でも、わからなくなりたいんだよね、優しくしてほしいから」

あきら「・・・荻原さん」

荻原「ん？」

あきら「わかりました」

荻原「本当？」

あきら「・・・わかるうと思います」

荻原「え、大丈夫、それで？ 無理しないでいいんだよ」

あきら「お母さんが僕のことどう思っても、僕のこと大事なのはわかるんです・・・」

荻原「・・・そうだね」

あきら「しよがないことも、わかるんです」

荻原「・・・そっか」

あきら「・・・お腹空きました」

戸部「さっきさういうの無くなったって言ったじゃ・・・」

荻原「いいんです、お腹空くのは大事なことです・・・あきら君、帰ろうか」

あきら「はい・・・」

荻原「一緒に帰ってもいい？」

あきら「・・・」

荻原「いい・・・でしょうか・・・」

あきら「・・・」

あきら、頷く。

荻原「ありがとう。(戸部に) じゃあ、お世話になりました」

戸部「いいえ、お気をつけて」

あきら「ありがとうございました」

戸部「・・・うん」

荻原、あきら、去る。

戸部、二人の背中を見ている。

小川家リビング。せんべいを貪っている母と小春。

母「止まらなくなるね」

小春「逆にお腹空いてきちゃった」

母「ちゃんとしたもの食べたいね」

萩原、やってくる。

萩原「え、小春なんでいるの」

母「あ、萩原さん」

萩原「連絡したんだけど」

母「あ、ごめん、おせんべ食べてた」

あきら、やってくる。

母「あきら」

あきら「・・・うん」

小春「・・・ただいまおかえりだよ」

あきら「ただいま」

母「おかえり」

萩原「あ、さつき公園で会って」

母「あ、そうなの、そっか」

少しの間。

小春「お父さん仕事は？」

萩原「あ、うん、あ、じゃあ僕たちは一回帰るね」

小春「え、仕事休んだの？」

母「あ、ごめんね、ありがとう」

萩原「あ、いいのいいの、また連絡しようだい」

母「うん、ありがとう」

小春「休むって連絡した？」

荻原「これからするから」

小春「これから!?!」

荻原、小春去る。

小春の声「お邪魔しました」

間。

母「あ、お茶飲む?」

あきら「・・・いい」

母「そう・・・あ、おせんべい食べる?」

あきら「・・・うん」

母「そう・・・あ、食べる?」

あきら「・・・うん」

母「あ、うん、食べな食べな」

あきら「あ」

母「ん?」

あきら「やっぱお茶も飲む」

母「うん、飲みな飲みな」

母、あきらにせんべいとお茶を渡す。

あきら「・・・」

母「あ、ごめん、雪の宿だ」

あきら「うん、大丈夫・・・」

あきら、せんべいを食べる。

母「・・・あ、あのね、お母さんね」

あきら「・・・」

母「あきらのこと、大事に思ってる、ちゃんと。病院、どっちでもいい。大学も、どっちでもいい。あきらがしたいように、して欲しい」

あきら「・・・」

母「・・・あきらのお父さんね・・・本当のお父さん・・・あきらのお父さんは、あきらが生まれる前にいなくなっちゃったの。だからあきらの見た目がどうのこうのとかじゃない」

あきら「・・・」

母「そんなところで悩んでほしくなくて」

あきら「・・・うん」

母「あの人は世界改革とかなんかよくわかんないこと言っていなくなったの」

あきら「・・・え」

母「お母さん、あきらを生んで後悔したことないよ」

あきら「・・・あの」

母「うん」

あきら「僕・・・は、病気とかじゃ・・・ないと思う・・・」

母「うん」

あきら「病気・・・じゃないと・・・思いたくて・・・」

母「うん」

あきら「・・・老けてるだけで・・・だから、多分周りの人と変わらないと、思う・・・僕より変な人はたくさん、いるから・・・」

母「うん」

あきら「うん・・・だから・・・なんだ・・・僕は・・・ただの・・・小川あきらです」

母「・・・うん」

暗転。

半年後。

ネットカフェの受付カウンターにあきらと福山が立っている。

福山「別に僕は自分のことをかっこいいと思ってるわけじゃないの。普通かなって。あ、普通より少しだけ見やすい？　なんか、あくまで見やすいくらいなんだけど、普通よりは見やすい・・・」

あきら「あ」

福山「普通よりは見やすいんじゃないかなって。なんかこの前も渋谷のハチ公前で・・・」

あきら「あの」

福山「ちょっと待って。まずは僕の話聞いて。なんかこの前も、渋谷のハチ公前で目覚ましテレビ・・・」

あきら「僕もうあがりです」

福山「え、もうそんな時間？」

薫が来る。

薫「お疲れ様です」

あきら「あ、お疲れ様です」

福山「・おう」

薫「小川くん、引き継ぎお願いします」

あきら「あ、うん。トイレとか下は全部掃除終わってます。シャワーも終わってます。あ、本棚だけ、チエックまだです」

薫「了解です。ありがとうございます」

あきら「うん」

福山、薫、視線を合わせるが、すぐ逸らす。

あきら「あ、じゃあお先失礼します・・・」

福山「あ、小川くん」

あきら「はこ」

福山「シフト変わってくれない？」

あきら「え」

福山「なんか今日、体調優れないんだよね」

あきら「あ、でも僕このあと用事が・・・」

福山「あ、じゃあ来週は？ 来週からは？」

あきら「いや、ちょっと・・・」

薫「あ、小川くん」

あきら「はい」

薫「私、今月いっぱいここでやめることになったんだ」

福山「え」

あきら「え、そうなの」

薫「うん。なんかやっぱり合わなかったみたい」

福山「・・・」

あきら「そっか・・・残念だね」

薫「やめても仲良くしてね、良かったら」

あきら「あ、う、うん・・・」

福山「・・・」

あきら「あ、じゃあ、お疲れ様です・・・」

薫「お疲れ様」

福山「お疲れ・・・」

あきら、去る。

福山「・・・え、本当？」

薫「え、なにが」

福山「え・・・え、やめるの？」

薫「はい」

福山「・・・え、友達だよ、マジで」

薫「なにが？」

福山「・・・え、部屋にいた子は・・・友達・・・」

薫「・・・」

福山「髪切った？」

薫「切ってません」

暗転。

2018号室。真っ暗の中、中央に小さな灯りがある。座っているあきら。

戸部、パソコンを打っている。

あきら「・・・楽しいですか？」

戸部「まあね」

あきら「2チャンネル」

戸部「そう」

あきら「何もしてないのと同じじゃないの」

戸部「表面上はね」

あきら、小さく笑う。

戸部「楽しい？」

あきら「面白」

戸部「何が」

あきら「戸部さんは何もしてないのに、戸部さんの中ではたくさん動いているのが」

戸部「・・・馬鹿にしてる？」

あきら「凄いいい思ってる」

戸部「そう。尊敬されるのは好きだ」

あきら「尊敬はしてないです」

戸部「学校は楽しい？」

あきら「・・・え、なんか・・・お父さんみたいですわね」

戸部「他になんて聞くの。大学行ってるんでしょ」

あきら「まあ、そっか。・・・楽しいとかはないです。・・・卒業しないと、せっかくお母さんに行かせてもらってたし。・・・留年してるけど」

戸部「楽しくないことは、後から楽しくなるための準備だから。思う存分楽しくなさを味わった方がいい」

あきら「・・・なんですか、今日はお父さんの日ですか」

戸部「・・・そうかもしれない。もしあの子が生まれていたら、今日は出産予定日だから。お父さんになった日だ」

あきら「・・・」

戸部「その子が生まれたかもどこにいるかもわからないけどね」

あきら「・・・僕、今日誕生日なんです」

戸部「・・・」

あきら「・・・奇遇ですね」

戸部「おめでとう」

あきら「・・・」

戸部「プレゼントとかないな。・・・あ、受付でカップめんとか買おうか？」

あきら「あ、いや、大丈夫です。おめでとうって言うてくれただけで。・・・」

戸部「謙虚な子だね。それくらいならいくらでも言うよ。おめでとう、あきら」

あきら「・・・ありがとうございます」

あきら、笑う。

17

病院。

体中包帯が巻かれた荒井がいる。駆けてくるあきら。

あきら「荒井くん」

荒井「あ、あきら」

あきら「大丈夫？ ブランコで首を吊ろうとしたって・・・」

荒井「うん、大丈夫だよ。そんなことより今日あきら誕生日だろ？ プレゼント用意したんだ」

荒井、鞆の中から本を出す。

荒井「はい、相田みつをの詩集」

あきら「荒井くんが読むべきだよ。生命力あふれる言葉を胸に刻みつけるべきだよ」

荒井「僕はもう何度も読んだよ。でもわからないんだ。生きなきゃいけない理由が」

あきら「・・・どうしてあんなことしたの」

荒井、本をあきらに渡す。

あきら「ありがとう。話せるならでいいんだけどさ」

荒井「・・・理由なんてないよ。死にたくなったわけでもない。生きるって、僕には難しくてさ。不幸なわ

けでもないんだけど」

あきら「僕になにか出来る？」

荒井「・・・またお見舞いに来て」

あきら「そんなことでもいいの？」

荒井「うん。訪ね人って、嬉しいんだ」

あきら「わかった。明日も来る」

荒井「明日は大学でしょ」

あきら「大学終わったら来るよ」

荒井「わかった。待ってる」

あきらの電話が鳴る。

あきら「あ」

荒井「談話室行けば電話OKだよ」

あきら「あ、うん。じゃあ明日ね」

荒井「うん」

あきら、去りながら電話に出る。

遠ざかるあきらの声だけが聞こえている。

あきら「もしもし。あ、お母さん？ え、もう駅？ あ、お父さんと姉さんも一緒？ …うん…たぶん入ると思うけど、狭いよ、一人暮らし用の部屋だし…いや、いいけどさ…あ、じゃあ、あと10分くらいで駅着くから。うん…ん？ …あ、うん…ありがとう」

了